

慶谷壽信先生の学問などについて (6)

—有坂学1、拗音説 (=重紐論) —

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することにしました。

\* \* \* \* \*

吉池：(1)(2)で慶谷先生との出会いなどについて、(3)(4)(5)では慶谷先生とインド学について話し合いました。今回からは慶谷先生の視点をとおして有坂秀世の学問について話し合いたいと思います。

中村：先生は有坂秀世の学問は「日進月歩」であったとよく評していました。もっともこの評価は服部四郎氏の評価を引用してのものです。この日進月歩というキーワードをとおして、慶谷先生と有坂氏の学問の関係を探るといえるのはいかがでしょうか。

吉池：先生のおかれたもののなかで、有坂氏の学問を「日進月歩」と評したものは三つほどあります。

・1986年「有坂秀世略伝試稿—出生から高等学校卒業まで—」東京都立大学『人文学報』180:1-47。(『有坂秀世研究—人と学問—』160-161による)

有坂氏は、一般に自説に頑固であるかのような印象を与えている。確かに、その音韻論に関しては、そのような印象を与える点もなくはない。しかし、研究者として事態を的確に把握し、変り身の速さをみせるのも、有坂氏の特徴の一つである。頑迷であれば、「日進月歩」<sup>(9)</sup>たり得ないではないか。『音韻論』という著作にしても、三十歳そこそこの青年学徒の作である。本人としても、完全に満足はしていなかったことであろう。自説を修正するだけの健康と時間とを天から与えられなかったにすぎない。大学卒業後二、三年のころに書かれた『上代音韻攷』(三省堂、昭和三十年七月)が、その後、部分的にせよ、個々の論文の形でいかに書き改められていったかを考えれば、容易に納得できることである。

(9)、「日進月歩」の表現は、服部四郎氏による『語勢沿革研究』の跋文「有坂秀世君の遺著『語勢沿革研究』を読みて」p. 二一二にみえる。

・1988年「有坂秀世「音韻論」(『音聲の研究』第VI輯)の成立に関する卑見」東京都立大学『人文学報』198:97-142。(『有坂秀世研究—人と学問—』338による)

「日進月歩」の実例の一つは、「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(四)」(『音聲學協會會報』第49号、第51号、第53号、第58号、昭和12年11月、昭和13年3月、7月、昭和14年7月)である。四等專屬韻直音説は、「カールグレンの拗音説を評す(四)」に至って、はじめて提出された。従って、「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(三)」までとは叙述に一貫性を欠く点が生じた。そこで、「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(四)」を『國語音韻史の研究』(明世堂、昭和19年7月)に収めたときに、相応の訂正がおこなわれた。

また、昭和7、8年ごろに書かれた『上代音韻攷』では、切韻の基礎となった言語は、隋代長安音とされていたが、「隋代の支那方言」(『方言』第六卷・第一号、昭和11年1月)では、「河南省地方の言語を基礎とする北方標準音」と訂正された。

そもそも、『語勢沿革研究』において、古代日本語における「vowel-gradation ノ法則」を推定しながらも、いわゆる上代の特殊仮名遣の知識によってその誤りを知るや、「國語にあらはれる一種の母音交替について」(『音聲の研究』第IV輯、昭和6年12月。執筆は、大学卒業直後の昭和6年5月。)に書き改めたことが、有坂氏の転身の速さをしめしている。

「日進月歩」の有坂氏ではあったが、「音韻論」に継承された素材は、すでにのべたごとく、あまり訂正することを必要としない、ゆるぎないものであった。加えて「日進月歩」の本領は、われわれのめにみえないところで展開されていた。それまでに書きためたものを集めても、『音韻論』のごく一部にしかならない。「今回新しく書いた」篇章の構想に、有坂氏の努力は、人知れず向けられていたと考えられる。

・1989年「著書未収録の既発表論文について」『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』有坂愛彦、慶谷壽信編、三省堂：3-7。

『上代音韻攷』の原稿は、言語誌叢刊の一つに予定されていたといわれるが、当時これが公刊されなかったことを、私は有坂氏の名誉のために喜ぶ。もし公刊されていたならば、有坂氏は、学説の修正に追いまくられたことであろう。一例を挙げれば、河野六郎氏の指摘するように、「隋代の支那方言」と『上代音韻攷』の当該部分とでは、大きな開きがある。旧稿を修正しながら、すこしずつ発表していったとしても、「カールグレン氏の拗音説を評す」のように、『國語音韻史の研究』で修正を要するほど、「日進月歩」の有坂氏であった。(6頁)

中村：この引用によりますと、慶谷先生が日進月歩の例として挙げたものは次の四点になりそうですね。

①拗音説(=重紐論)

②切韻の基礎方言

③vowel-gradation / 法則

④『音韻論』

この四点についてひとつずつ取り上げていきましょうか。まずは①に相当する「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(四)」です。

吉池：そもそも、有坂氏が批判の対象としたカールグレンの拗音説とはどのようなものだったかという点から確認したいのですが。

中村：カールグレンはまず現代諸方言や外国漢字音などの分析から、韻図の一等と二等に配されるものは拗介音を持たない直音で、三等と四等に配されるものは拗介音をもつ拗音と考えました。そして、主に三等に配される韻、すなわち三等韻には子音的な拗介音 [-j-] を想定し、専ら四等に配される四等韻には母音的な拗介音 [-i-] を想定した訳です。朝鮮漢字音で三等字が直音（「件 (kən)」など）、四等字が拗音（「堅 (kiən)」など）になることが最大の根拠でした。

吉池：それに対して有坂氏は、三等韻の中にも四等に配される字があるのにカールグレンはそれを見逃している、あるいは無視しているとして、批判を加えた訳ですね。

中村：はい。カールグレンが朝鮮漢字音で拗音になるとして挙げた例は四等韻の字ですが、実際には三等韻の四等字も同様に拗音です。したがって三等韻と四等韻の介音だけでなく、三等韻における三等と四等の対立にも問題は存在することになります。三等韻の唇音・牙音・喉音における三等字と四等字の対立は後に「重紐」と呼ばれて、とりわけ日本では大きな研究テーマに発展することになりました。有坂氏は日本・朝鮮・ベトナムの漢字音や閩方言などを参考にして、三等字（今では通常「B類」と呼ばれる）に中舌的な拗介音 [-j-] を、四等字（今では「A類」）には前舌の拗介音 [-i-] を想定しています。これが「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(三)」の骨格ですが、さらに同論文（四）に至って、『切韻』の時代には四等韻は拗音ではなく直音であったという仮説を提唱して衝撃を与えました。ところで、慶谷先生は、この論文についてどのような取り上げ方をしていますか。

吉池：慶谷先生は幾つかの論文で「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(四)」について論じていますが、拗音説（＝重紐論）自体を展開するというのではなく、拗音説がいつ、どのように提示され、短日月の間にどのように改訂がおこなわれ、いつ完成をみたかという説の沿革に焦点をあてています。この短日月の間に行われた改訂を「日進月歩」と称するわけです。このことについては、1993年の「有坂秀世博士のこと」（『トンシュエ』5:8-10。『有坂秀世研究一人と学問—』292-294による）に簡潔にまとめられています。

有坂氏の拗音説（＝重紐論）を追跡すれば、歿後に刊行された『上代音韻攷』（三省堂、昭和30年7月）にさかのぼる。拗音説は、『上代音韻攷』【昭和8年頃の著作：吉池補】から「萬葉假名雜考」（昭和10年7月）、「カールグレン氏の拗音説を評す（一）、（二）、（三）」（昭和12年11月、昭和13年3月、7月）を経て、四等専属韻直音説を表明した「カールグレン氏の拗音説を評す（四）」（昭和14年7月）に至って、一応完成した。ただし、著書『國語音韻史の研究』（明世堂、昭和19年7月）では、「拗音説を評す（一）、（二）、（三）」を「同（四）」に従って書き改めている箇所があり、全体としても修正がなされている。従って、完成は『國語音韻史の研究』においてであると解される。

有坂氏は、『切韻』という韻書のなかにカールグレン氏が見逃した対立する音のペア（韻図の三等欄と四等欄に配置される）を発見し、その対立を介音の[-j-]（中舌的）と[-i-]（前舌的）に帰した訳ですが、慶谷先生の説明では、その説は『上代音韻攷』→「萬葉假名雜考」→「カールグレン氏の拗音説を評す（一）、（二）、（三）」と展開されていきました。ところが、「カールグレン氏の拗音説を評す（四）」に至って、韻図の四等に配される四等専属韻が介音を持たない直音であるという大きな発見がありました。この四等専属韻が直音であるという結論は、それまで公表してきた「カールグレン氏の拗音説を評す（一）、（二）、（三）」の記述に修正を迫ることとなり、『國語音韻史の研究』に再録するに際して、修正を施して収めたという次第です。したがって、拗音説は『國語音韻史の研究』において完成をみたということになります。

中村：具体的にはどのような修正がなされたのでしょうか。

吉池：先ず、四等専属韻が直音であるという結論と矛盾しないように、諸論文を書きかえて『國語音韻史の研究』に収めたという点を挙げるができます。「萬葉假名雜考」には「四等専属韻の拗音的要素は、glide的なjにあらずして、固定した舌の位置を持ったiであった。」とあるのですが、四等専属韻の拗音的要素はiであったという部分は、四等専属韻が直音だったとの結論に抵触します。そこでこの記述を含む部分を削除しました。

また「カールグレン氏の拗音説を評す（一）」には「さて、 $\gamma$ 韻が、 $\alpha$ 韻や $\beta$ 韻と異なる或特色を持つてゐたといふことは、幫滂並明見溪疑曉來諸母の切字の問題（既述）とも關聯して考へられる所であり、その意味から考へる時は、カールグレン氏が、 $\alpha$ 、 $\beta$ の拗音的要素jに對し、 $\gamma$ の拗音的要素をiと推定したことは、甚だ有意義なことである。 $\alpha$ 、 $\beta$ のconsonantiqueに對する $\gamma$ のvocaliqueといふ、この結論に對しては、私は特に反對すべき理由を持たない。」とあるのですが、 $\gamma$ 韻すなわち四等専属韻の拗音的要素をiと推定したことは甚だ有意義なことである、という記述は四等専属韻が直音であるという結論に抵触します。そこで、この部分を次のように書きかえました。「さて、 $\gamma$ 韻が、 $\alpha$ 韻や $\beta$ 韻と異なる或特色を持つてゐたといふことは、幫滂並明見溪疑曉來諸母の切字の問題（既述）とも關聯して考へられる所であり、その意味から考へる時は、カールグレン氏が、 $\alpha$ 、 $\beta$ の

拗音的要素  $i$  に對し、 $\gamma$  の拗音的要素を  $i$  と推定したことは、巧妙と言ふべきであらう。」  
「甚だ有意義なことである。」を「巧妙と言ふべきであらう。」に書きかえ、「 $\alpha$ ,  $\beta$  の consonantique に對する  $\gamma$  の vocalique といふ、この結論に對しては、私は特に反對すべき理由を持たない。」を削除したわけです。

上に一例を挙げましたが、舌音・半舌音、齒音・半齒音の拗音的要素の性質に関する記述も、『上代音韻攷』→「萬葉假名雜考」→「カールグレン氏の拗音説を評す(一)、(二)、(三)(四)」→『國語音韻史の研究』と書き改めがみられ、その後の“類相関”の議論につながります。

これらのことについては、慶谷先生の「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで—」(『中国語學』228、1981年。『有坂秀世研究一人と學問—』に再録)に説明があります。

中村：我々は現在では通常、三省堂版の『國語音韻史の研究 増補新版』(1957)によって有坂論文を読みますから、「カールグレン氏の拗音説を評す」も四等韻直音説とともに違和感なく読んでいますが、実際には『上代音韻攷』以来、何度も少しずつ修正されてきたということなのですね。そして慶谷先生は、修正の積み重ねという事実の方に関心があり、そこにこそ有坂氏の本領があると考えているようです。ところで少し気になるのですが、慶谷先生は前述のように「研究者として事態を的確に把握し、変り身の速さをみせるのも、有坂氏の特徴の一つである」と評していますが、これは肯定的な評価と受け取ってよいのでしょうか。

吉池：おっしゃるように、慶谷先生は“日進月歩”ということについて、“変り身の速さ”とも“転身の速さ”とも表現するのですが、これは私の語感でも肯定的なものとはいえません。しかし、慶谷先生が肯定的な評価としてこれらの語を用いたことはたしかです。おそらく、有坂秀世には速さとは反対の風貌や印象があり<sup>1</sup>、そのような表面的なものに対比

<sup>1</sup> 慶谷壽信(1986) (「有坂秀世略伝試稿—出生から高等学校卒業まで」『人文学報』180。『有坂秀世研究一人と學問—』に再録)によると、學習院初等学科の様子として「なにか、ぼんやりとしていて、授業のベルが鳴っても、ひとり花園にのこっていたりなどして、先生がそれを探しに教場から出て来てやっと見つけて連れて戻られたことなどもあったとすることで、母堂が、先生から、「どうも秀世さんは低能児ではないでしょうが、少しぼうっとしています」と注意されたものだったそう。」とあり、東京府立一中で弁論部の役員として演説に参加した様子として「論旨はすぐれているのであるが、不自然に大声を張りあげている感じで、聞いていて痛々しかったという。盛んに身ぶり手ぶりもまじえたが、運動神経がにぶかったから、動きがぎこちなく、すこしひかえた方がよいのではないかと東恩納寛惇先生(後に東京府立高校教授)より注意を受けたりした。」とある。慶谷壽信(1990) (「有坂秀世略伝試稿—大学入学から卒業まで」『人文学報』213。『有坂秀世研究一人と學問—』に再録)によると、大学入学後の様子として金田一京助(1952) (「有坂博士の想い出」『國語學』10) を引用して「当時の有坂さんは、小柄な、細おもての、色の白い、いかにもひよわそうな青年で、いつも、かがみ加減にきちんと机に向って、じっとして居られて、私が何か言っても、ごく言葉少なに、ただ「ハアッ！」と、うなずかれるだけという風な、

して、有坂秀世の精神面の鋭さを“速さ”という語をもちいて表現したのではないでしょうか。

中村：つまり、有坂秀世が幼少のころから鈍重な印象を持たれていたことを踏まえて、学問の面では新たな知見を得るたびに自説をただちに更新してゆく姿勢を慶谷先生なりに表現したということですか。少なくとも「日進月歩」という服部四郎氏の評を慶谷先生はどのように解釈した訳ですね。

---

極めて地味な存在だった。」とある。